



TITLE:

<批評・紹介>金代女眞の研究 三上
次男著

AUTHOR(S):

小川, 裕人

CITATION:

小川, 裕人. <批評・紹介>金代女眞の研究 三上次男著. 東洋史研究 1938,
3(3): 245-257

ISSUE DATE:

1938-02-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/145605>

RIGHT:

ない様であるが、實は先業を精確に集大成をしたと見るべきものである。その編纂の苦心等は史林第二十三卷第一號の鴛淵先生の紹介に見えるが、我等は今にして先業の増訂完成版を有するに至つたのである。かくて久しく顧みられなかつた滿洲語學は新しき出發點を茲に於て持つであらう。滿洲史料の研究も茲に於て新しき工具を見出すであらう。豈に只我國學界のみならず、歐洲滿洲支那の學界も此書の出世に於て新しい滿洲學を知るに至らう。

我國の滿洲語學は先蹤を踏んで辭典を以て再び現出したが、今よりは史學は固よりであるが語學に於ても世界の權威として確立されねばならない。滿洲語は文語としても最近その存在を抹殺せらるゝ様になつたらしいが、學術界に於ては無用視されてはならない。滿洲國の語學的調査も學術的立場に於て急速に實施されねば、動いてゐるこの時代を經過してつては後悔するに至らう。單なる文語語彙ではあるが、この増訂新版の出現を機として滿洲語學の躍進を期待したい。それが東洋文化開發に對する我國學界の義務であらう。此等の語を以て本書紹介の辭とする。(石濱純太郎)

金代女眞の研究

三上 次男著

昭和十二年十二月日滿文化協會發行
四六倍版・五五六頁・索引・附圖・
頒價五圓五拾錢

本書の惠與をうけたのは舊臘も押迫つた二十八日のことで、懇到なる池内博士の序文を以て卷頭を飾り、本文五百五十六頁に索引及び多彩刷の附圖を添へた堂々たる大書冊を手にしては、著者の驚くべき努力をまづ感じた。同じ方面の研究に志す者としての異常なる興味と昂奮とを以て、歳末歲始の數日を本書の讀破にあてたことは言ふまでもない。左に簡單に本書の紹介を試み若干讀後の感想を附加へたいと思ふ。本書は二篇の論文より成り、第一篇は『完顏阿骨打の經略と金國の成立』(一二四頁)、第二篇は『猛安謀克制の研究』(四三三頁)と題し、ともに昭和八年以降著者が滿蒙文化研究員として研鑽を積んだ輝しき成果である。

第一篇『完顏阿骨打の經略と金國の成立』は、池内博士の『金史世紀の研究』の後を承けて、遼天祚帝の天慶四年獨立の旗幟を掲げた生女眞完顏部の酋長阿骨打が、次第に遼の版圖を經略して金國を建設するに至

つた経過を考究したもので、特に経略自身の歴史地理的研究に力を注いでゐる。第一章 序論、第二章 舉

月に於ける照散城の戦の闡明に資してゐる手際などは甚だ巧みである。

兵前に於ける按出虎水完顔部、第三章 寧江州の戦と近隣諸部の招諭、第四章 出河店及び韓鄒濤の戦、第五章 遼北邊諸州の陷落、第六章 遼魯古城役と黃龍府の陷落、第七章 保州・開州の攻略(一)、第八章

歴史地理的考察に當つては之に重點を置いたものだけあつて、『滿洲歴史地理』『滿鮮地理歴史研究報告』等に發表せられた先人の諸説の内、探るべきは探り探るべからざるものは克明な考證を施して後その擬定を試み、かくて舊説の訂正せられしものも多く、新たに明白にせられた地も亦尠くない。中にも注目すべきは、

天祚帝の親征(附説 耶律章奴の叛)、第九章 高永昌の叛亂と金の東京道經略(附説 照散城の戦)、第十章 保州・開州の攻略(二)第十一章 長春路占領、第十二章 顯州方面の戦鬪、第十三章 結論 に分つて詳述し、女眞舉兵の事情、遼軍敗北による遼東の混亂等がよく敘述せられ、又社會的不安と女眞族の擡頭とに刺戟された遼陽の渤海人高永昌の叛亂の顛末、この亂平定を契機として始められた遼東半島及び保州(今鳳凰城)、開州(今義州)に於ける係遼籍女眞の經略、保州攻略に於ける高麗との交渉、遼西方面への進出等の諸事項が要領よく論述せられてをり、完顔部の金國への發展の姿相が心ゆくばかりに描寫されてゐる。又論述の過程に於て新出資料に注意を拂ひ、就中奉天省海龍附近に於て發見せられた摩崖碑を利用して、收國二年五

第三章に於て女眞軍が始めて遼軍と衝突した寧江州の位置を定めるに當り、松井學士(即吉林通志説)の石頭城子説、池内博士の大榆樹説に賛せず、綿密なる考證の結果、榆樹溝の西方遠からざる地にして混同江に近き所となし、その候補地として五家站及びその西方珠家城子或はその西方約十支里の小城子を挙げたり、又第五章に於て、池内博士が阿骨打の舉兵前後屢々史上に現はれる咸州の中には、今の奉天省開原に比定されてゐる「安東軍下節度」の咸州の外に別な今一つの咸州が黃龍府附近に存してゐたことを想はしめるとの疑問を提出せられてゐるに對し、咸州は「安東軍下節度」のみでしかあり得なかつたことを證明してゐることで

恩師の説と雖も従ふべからざるものには敢然として之に異説を立てゝゐる良心的態度には敬服しなければならぬ。

本篇を讀んで心づいた諸點を挙げれば、第一に懿州の位置に關する考定で、一昨年出版された『滿洲金石志稿第一冊』に阜新縣志より懿州城南學田碑を轉載し編者園田一龜氏が略解を附して、遼金元三代を通ずる懿州治は、この碑の現存する錦州省阜新縣東北八十里塔營子の北方に當るとの考説を出してゐるにも拘らずたゞ『滿洲歷史地理二』の箭内博士説に従つて之を彰武縣附近に比定してゐるのは、歷史地理の考究に主力をおき又新資料には絶えざる注意を拂つてゐる本篇に於ては遺憾なる瑕瑾となさなければならぬ。この碑は頃日現地に赴いた須佐嘉橘氏によつて拓出せられ、我もその拓影に接するを得た。之に關しては本誌三の二に田村學士が紹介を試みてゐる。又顯州、乾州の位置に關しても『滿洲歷史地理二』の松井學士の説に左祖して顯州を今の北鎮縣東方に、乾州を北鎮縣の東南三十餘支里に比定してゐるが、村田治郎博士の説かるる如く、顯州は今の北鎮縣に、乾州は北鎮縣西南方と

みるのがよい様に思はれる。著者も卷末の附圖には、乾州の位置を北鎮縣の南方よりやゝ西寄りに置いてゐる。本文に言ふ所とはあはないが、この方が却つてよいであらう。そのほか第十一章の金山縣の位置の考定には王國維氏の所論にも言及してほしく、第十章一〇四頁に十二年三月庚寅の記事として引用してゐる高麗史卷十四睿宗世家の一文の解讀には今一層の精緻がのぞましく思はれた。なほこの記事は實は三月辛卯に繫けられたものである。

第二篇『猛安謀克制の研究』は、通論と各論とに分れ、通論に於ては、猛安謀克制の成立より崩壊に至るまでの過程を歴史的に敘述し、各論に於ては猛安謀克部の機構竝に制度自體を分析研究せんとしたものである。第一章序説に於て著者の言ふ如く、猛安謀克の制度は、實に女真人による金國統治の民族的竝に軍事的基礎をなしたもので、この制度の研究こそは金代に於ける女真人が如何なる状態に在り又如何なる變遷をなしたかを知る上には必要缺くべからざるものである。さればこそ早く故箭内博士は『金の兵制に關する

研究』『滿鮮地理歴史研究報告二』及び「蒙古史研究」所收）に於て兵制上よりこの制度の解明に着手し、烏山教授は又『猛安謀克と金の國勢』（『朝鮮支那文化の研究』）及び「滿鮮文化史觀」所收）に於て之が概觀を試みられた。しかしこの制度の含む問題は兩氏の研究によつて闡明し盡されるには餘りに大きく且つ複雑である。この點に着眼した著者は總ゆる角度より該制度を考察せんとした。本篇の構成はかくの如き著者の意圖を如實に物語つてゐる。以下章節に従つてその内容を紹介し、之に對する感想を述べよう。

通論は第一章「序説」以下八章に分れてゐる。

第二章「猛安謀克制の制定とその發展——太祖・太宗時代」。第一節「舉兵前の猛安及び謀克」では、猛安謀克が、既に阿骨打の舉兵前より女眞社會に於ける軍事上の一地位として存してをり、謀克は戰時に特に用ひられた呼稱で、平時は字輩——部長として部民を率ゐてゐた。猛安は當時恐らくは猛安謀克、即ち千戸（千名）を支配する謀克と呼ばれてゐたが、後世に至り重複の煩を避けんが爲めに簡略せられたものであるとの新見解を以て冒頭を飾り、第二節「猛安謀克制の創定」

に於ては、天慶四年寧江州の戰捷後、阿骨打は他の同盟女眞諸部の部長たる字輩と區別せんが爲めに、完顏氏の直屬部及新占領地の一部に於て、從來は部隊指揮者或は部隊單位の名として存した猛安謀克に、行政組織上の一單位、及びその部長たるの新意義を附與し、之を擴大強化することによつて中央集權の實を擧げたことを明確に指摘し、第三節「猛安謀克制の發展」では、降附民の猛安謀克制への編成、新領土に於ける本制度施行の經過を記してゐる。

第三章「猛安謀克制の強化と女眞戸の北支那移住——熙宗時代」。第一節「字輩制の廢止」では、金室の中央集權の實の擧つた天會十二年、舊同盟女眞諸部の勢力を代表せる字輩制の廢止を敢行し、以後猛安謀克制は名實共に女眞人の行政、軍事組織の基礎となつたとを略述、第二節「漢人及び渤海人猛安謀克の廢止（天眷三年）」は、中心兵團の強化單一化を企圖した熙宗が遼東方面の漢人及び渤海人の猛安謀克を廢止した顛末を記してゐる。廢止の年次に就ては金史大昃傳に天眷三年、兵志に皇統五年とあり、烏山教授は禁令の兩度に互る發布とみてゐるが、著者は之を天眷三年に定め

てゐる。第三節「猛安謀克部の新領土移住」では、猛安謀克部の新領土への移住を國初より敘述し、就中北支那への大移動は太宗天會九年より始められて熙宗天

眷末年或は皇統元年に終了したと見てゐるのは注目すべきであるが、移動の開始終了の事情に關する考察にやゝもの足りなさを感じる。殊に移動終了の時期を天眷末年或は皇統元年と見るのは餘りに史料に即し過ぎた考で、劉豫齊國の廢止、皇統初の宋との媾和といふ様な大勢の變化を通觀すれば、必ずしもしか斷定はできまいと思ふ。第四節「猛安謀克等級制の制定」は、皇統五年、猛安謀克を三等に分ち、特に宗室を上としたことは、漢人天子の如き性格思想を備へた熙宗が、開國の功臣の多くが世を去り中央集權の實の擧つたこの頃、中國朝廷の例にならつて君臣の別を明らかにし猛安謀克制に一層國家的統制を加へんが爲めであつたとなし、これより後は猛安謀克たるには特別の事情を必要とし、それ故皇統末年以後叙授されたものは特に世襲猛安謀克と呼ばれ榮爵とされたことを指摘した甚だ犀利にして且つ興趣深き一節である。特に、洪皓の鄱陽集により、皇統五年に定められた上・中・下の猛安

謀克は宗室を上、女真人を中、奚・契丹・漢人を下としたものであらうとしてゐるのは従ふべき推定であらう。

第四章「猛安謀克制に對する國家統制の進行——海陵時代——」。第一節「等級制の廢止と猛安謀克の省併（天德二年）」。第二節「上京路宗室猛安の北支那遷徙（正隆元年）」に於ては、熙宗を弑逆して篡位した海陵王が、舊勢力を爰除して自己の勢力の扶植をはからんが爲めに斷行した燕京への遷都を始め猛安謀克に對する諸工作に就て論述し、第三節「正隆末年の混亂」に於ては正隆末年征宋の役に於ける猛安謀克兵總動員、強制的徵兵に憤慨した西北路契丹人の叛亂、之に乗じた遼陽に於ける烏祿（世宗）の即位、征宋途上に於ける海陵王弑害等の諸事件を略述し、猛安謀克の混亂を描いてゐる。

第五章「國家統制下に於ける猛安謀克制と猛安謀克部に關する諸問題——世宗時代——」。第一節「遷授格の制定と猛安謀克の省併（大定初年）」に於ては、大定二年二月の遷授格制定をとり上げ、海陵時代亂脈に陷つた本制度を立直し、更に強力なる中央統制下に置き、間

接には猛安謀克中より海陵の勢力を驅逐せんが爲めに、從來特殊なる地位を保有せる猛安謀克に國家官吏としての一定の規格を與へたものとの解釋を新しく與へた。第二節「契丹人猛安謀克の廢止とその復活」には、正隆大定の交の契丹人の叛亂に懲りて、大定三年契丹人猛安謀克を廢し、猛安謀克戸は女眞猛安謀克中に編入したが、大定四年初に至り、亂に與らざりし契丹人等は再び猛安謀克部を組織せしめ、その長には又亂に與らざりし契丹人官吏を任命することに改めた經過を述べ、かゝる短時日に於ける驚くべき變化は、北方整備の必要によるものと推してゐる。この節に於ては、著者も二〇五頁註一に言及してゐる、「九年。…上疏論五事。…其二。契丹人可分隸女眞猛安。…上皆從之」とある金史思敬傳の記事を始め、すべて簡内博士が指摘した大定九年頃より以後に於ける金室の契丹人に對する態度の硬化に就て論及しておく必要があらう。又契丹人猛安謀克に對する金廷の措置はひとり北方關係のみならず南方宋との和戰の經過とも關係づけて理解してこそ始めて眞相が把握できるものと考へられる。第三節「猛安謀克戸貧困化」に於ては、女眞戸

は建國前後には貧富の差がはげしくなかつたが、その後門地あるものは官に用ひられて一般猛安謀克戸との間に身分財産上の懸隔を生じ、大土地の兼併を行ひ、一般猛安謀克戸の土地喪失、或は農奴化を來したといふ猛安謀克部内の社會的分裂の激化、猛安謀克戸の生活方法の變化、支那文明への感溺、奢侈、懶惰等による消費經濟の増大、給與地の薄惡と耕作樣式の變化、海陵南伐の失敗と動亂による窮迫等の諸事情を擧げて北支那移住猛安謀克戸の窮乏を略述し、大定十年前後彼等にとつて最も重大なる義務たる兵役すらも一部に於ては不可能となり、代つて募兵の議さへ採用されたのはこの結果なりとし、金廷がその貧窮化に對する根本的救済の必要を痛感するに至つたことを説き、第四節「猛安謀克部の大改革（大定二十年—二十三年）」には猛安謀克の新定、猛安謀克部の通檢推排と新科差の設定、不法領有地の整理と貧窮猛安謀克戸への土地再交附等の整理改革を説明、第五節「大定後期に於ける猛安謀克戸の移徙」に於ては、大定十九年より二十三年に亘り、薄惡なる給與地を代換して女眞戸を救済すべく敢行された北支那内部の移徙を敘述し、併せて上

京路方面防備の充實を目的とする大定二十四年速頻胡里改兩路猛安戸の上京移徙をも説いてゐる。なほこの一章は、著者が昨年發表した『金代中期に於ける猛安謀克戸』（史學雜誌四八の九・十）と相表裏をなすもの、猛安謀克部内の階級的分裂に着目したのは注目すべきである。

第六章「猛安謀克制の衰退——章宗時代——」 第一節

「國統制下に於ける猛安謀克」には、章宗明昌承安年間、北方諸民族の侵寇による西北邊境の騷擾に對處すべく、猛安謀克に肅軍的態度を以て臨んだこと、及び肅軍統制強化を目的として發布された諸規定に、處分の對象として世襲の廢止といふことが強調せられるに至つたことを指摘し、泰和五年以後の宋との戰に奮起勝利を博した猛安謀克軍の底力は一にこの統制肅軍の賜であつたとなし、最後に泰和八年承襲程試格を更定して嘗ては世襲制を誇つた猛安謀克もこゝに於てその權利を國家の手に返還し、自らは一介の官吏として止るに至つたといつてゐる。第二節「猛安謀克部の弱化和その對象」に於ては、章宗の統制強化の方針にも拘らず猛安謀克の懦弱貧窮化せし狀態を描寫し、又猛安

謀克戸と漢戸との軋轢を緩和せんが爲め、明昌二年兩者の通婚を許したことを挙げ、これを以て猛安謀克部組織崩壞の一現象とみてゐる。女眞戸と漢戸との軋轢はこの頃殊に甚だしくなるが、これは一方金代治下に於ける漢人の狀態を究明することによつて解決さるべき重要な問題なのである。

第七章「猛安謀克制の崩壞——宣宗より金末——」 第一節

「蒙古軍の侵入と金軍の敗退」に於ては、衛紹王大安二年より始められた蒙古軍の侵入、之に堪へかねた宣宗貞祐二年の汴京への遷都、三年の中都の陷落等の事件を中心に、猛安謀克軍の脆弱、特に上級指揮者の腐敗せる狀態を記し、第二節「河北軍戸の河南遷移」は、宣宗の南遷について河南に遷徙した河北軍戸に對する給土、給糧を繞る爲政者の論議を説述し、遷徙戸に對する處分の結果は、民租は舊に三倍して不平の聲は田野に滿ち、遷徙戸は土地を給さると雖も耕稼の法を知らず、腐敗墮落したことをまとまりよく敘述し、第三節「軍編成法の改變」には、貞祐三年各處に起つた義軍をも猛安謀克制に編成し、猛安謀克の官を義軍のみならず一般漢人にまで與へ、二十五人を以て一謀

克を組織したが、その内戦士は僅かに十八名に過ぎぬといふ如く、猛安謀克が兵制としても古への姿を失ひ唯形骸のみを残すに過ぎなかつたことを説き、第四節「猛安謀克制の崩壊」に於ては、河南遷徙軍は數十萬を算し、それに數倍する家屬は口を張つて哺を待つといふ寄食生活を行つた。かくの如き軍戸の不自然なる寄生生活が金の社稷を危うしたのであるとなし、第八章「結論」では上述の所を要記して通論を終つてゐる。

かくして猛安謀克制の歴史的變遷、金代治下に於ける支配階級としての女真人の狀態は明らかにされた。かくの如き複雑なる問題を概括的に敘述するといふことは至難のことである。我々はこれを爲し遂げた著者の絶えざる精進に對して滿腔の敬意を拂はなければならぬ。なほ又、他方金朝治下に於ける被治者階級たる漢人、契丹人等の狀態を究明することによつて、この問題の闡明に一步を進めることは、著者とともに我々に課せられた任務である。

(外山軍治)

各論は四章より成り各節を分つて猛安謀克に關する特殊研究を敘述して居る。

第一章「官吏としての猛安謀克に就いて」。自治的

行政組織たる一般猛安謀克と、軍事組織たる猛安謀克とを區別し、本章に於いては主として前者を取扱つて居る。第一節「官吏としての地位と任務」に於いては各地屯住の猛安謀克は防禦使や縣令の如く、單なる地方行政官として、管區の民政一般を掌る他に、軍指揮官として軍備の方面にも責任のあつたことを主張して居る。第二節「猛安謀克の叙任及び免官」に於いては世襲せられる一般猛安謀克の中に於いても、單に猛安謀克と記されたものと、世襲猛安謀克と記されたものとその意義に多少の區別のあつたことを指摘し、前者は主として國初軍指揮官として戰功のあつたもの、或は領土内の有力者に授與され、軍の統率權と共に所屬部民の統治權をも委ねられ、官吏的性質の多いものとし後者は熙宗時代に至り、從來の猛安謀克が飽和狀態に達して容易に授與されず、宗室或は特に國家に大功ありし貴族に列すべき人物にのみ授けられ、榮譽的性質の多いものゝ如く解して居る。他に注意すべきことゝして猛安謀克の任免權が、次第に中央政府の手に握られ來つた事實にも論及して居る。第三節「世襲猛安謀克及びその承襲」には、先づ世襲猛安謀克の地位が世

宗時代に至つて益々高められて來た事實を指摘し、次にその相續に就いて研究し、國初に於いては、建國前女真人社會の兄弟相續的舊慣が尙殘存して居たが、太宗の天會末年以後は支那思想の滲透によつて、長子相續が原則となつたことを記して居る。第四節「給與に就いて」では、金史百官志俸給の條の記載を整理し、これを表示して居るが、これは便利である。第五節「統屬關係」に於ては、著者は本節に於ける研究を次の如く要約して居る。太宗の前半までは都統司・軍帥司に隸屬したが、その後地方制度の整備と共に、總管府・節度使の管轄を受けることゝなつた。然し宋夏の國境、西北邊境の方面に於いては、その地方の猛安謀克の一部が統軍司及び招討司に所屬して居た。章宗の明昌初年、新に提刑司が置かれると、統屬關係は節度使及び提刑司の二種となり、承安四年提刑司が按察使と代つても、この關係は不變である。戰時には軍士として元帥府に屬したことは勿論である。第六節「猛安謀克の諸特質」では、猛安謀克の任務は熙宗時代を轉期として、軍事的方面を主としたことから、寧ろ民治行政方面に重點が置き代へられ、地方官としての彼等

の立場がその後益々重視されたことを述べ、又世宗の大定二十年頃からは、猛安謀克に對する國家的統制の強化された結果、古來よりの地緣的或は血緣的關係によつて結ばれて居た謀克と部民との關係が、漸く薄れて來たことを注意して居る。更に猛安謀克の特質として本職の讓渡と、兼職の可能といふ二點を附加し、又彼等が特權者として驕恣な振舞の多かつた事實をも指摘して居る。

第二章「猛安謀克部の社會的構造」。第一節「猛安謀克部成員の民族的關係」に於ては、國初猛安謀克の構成分子であつた漢人、渤海人、契丹人、奚人等は次第に除外され、或は不遇なる地位に置かれるに至り、金代を通じて正當に猛安謀克たり得たものは女真人のみなることを結論して居る。第二節「猛安謀克部の構成とその社會」では、原則として三百戸より成ると規定されて居る謀克内の社會經濟的單位は、單一戸ではなく大家族即ち家族共同體で、統率者なる謀克も、初はその謀克部の中心的大家族の家長より任命されたと主張し、最後に謀克の内部に於ける正戸と奴婢との關係等にも言及して居る。第三節「土地給與に就いて」

では、當時の猛安謀克の農耕が大家族制の共同耕作を原則としたことを推定し、史上には單に計口授地と記されて居る土地の給與も、戸或は個人に對してではなく、右の如き一定の同族團體を單位としてなされたことを主張して居る。第四節「科税及び科差」猛安謀克の税賦は、一牛具（民口二十五、耕牛三、田土四頃四畝）に付き、年一石に過ぎない牛具税及び若干の物力錢（財産税）のみであるが、差役は軍役以外にも種々課せられて、その義務の大きかつたことを述べて居る。

第五節「謀克部内の行政」には、謀克戸は州縣の間に在つて自らの村寨を營み、謀克によつて統率され、内には寨使（女眞司吏一人）が置かれ、謀克を佐けて庶務一般を掌つたことを述べて居る。

第三章「軍事組織としての猛安謀克制」第一節「猛安謀克の活動と常備軍の編成」に於いては、先づ猛安謀克の戦時に於ける活動を敘し、次いで熙宗時代から平時に於いても、その一部分は徵集されて常備軍として京師州縣、或は邊境各地の交替番戍に當つたことを指摘し、更に大定中期以後は、一般猛安謀克の貧窮の激化と共に、右の徵兵の法はこれを行ふことが困難と

なり、遂に募兵の法を援用するの止むなきに至つた事情を述べて居る。第二節「部隊統率者としての猛安謀克」では、太祖・太宗時代に活躍した行軍猛安謀克と熙宗以後これに代つて頻見する押軍猛安謀克を、從來共に單なる軍隊指揮官として同一視して居たのを、著者はこの兩者の間に質的區別をも認め、前者が單に戦時に於いてのみ敍授された臨時の官であるのに對し、後者は一般猛安謀克の代理者としての常備軍の長官をも含んで居たことを指摘して居る。第三節「兵力に就いて」に於ては、謀克（百戸）の員數を考へ、甲兵と、これと同數の阿里喜（副兵）を合して約百名とする考を採つて居る。次に猛安謀克軍の總兵力に就いて考へその數は國初より次第に増加し、世宗の大定年間には二十萬前後の兵を動員する事が可能であつたと決論して居る。第四節「謀克下の部隊組織」では、支那側の諸資料を整理し、隊首なる謀克の下には兩蒲里衍があつてこれを輔佐し、一蒲里衍は約五十名の戰士より成つて居り、戰士は裝甲の正軍（甲軍）と阿里喜（副兵）とに分れて居るが、この兩者の別は單に身體の強弱によるのではなく、身分上の關係を有して居たとの結論を

得て居る。第五節「徵兵及び募兵」に於ては、徵兵は著者が當時の女真人社會構成の基礎的單位と推定した大家族制を單位として行はれ、約六戸より成る一家族共同體から、家長たる父兄の一名が甲軍として、家長に次ぐ子弟の一名が阿里喜(副兵)として徵集されたと見てゐる。第六節「給與及び勞效」には、金史兵志養兵の條の記事により、各軍士に對する給與を階級別に考へ、給與の額を通じてその社會的地位の相違をも見んとし、又女真人部隊が非女真人部隊に比して厚かつたことを特に注意して居る。こゝに給與及び勞效を表して居るのは便利である。第七節「合扎猛安謀克に就いて」に於ては、親衛軍の母體なる合扎(親管)猛安謀克が皇室に直屬する部であること、國初より世宗末年頃までは皇帝の崩後は、これはその子孫に屬し、或は通常の世襲猛安となつたが、章宗以後は、これが崩壞して親軍は一般猛安謀克部より選出されたこと等を推論して居る。第八節「約言 附騎馬軍」に於ては先づ第三章に於ける所論を要約し、次に金軍は騎馬軍を主力として居ることとその特徴の存することを指摘すると共に、漢人を以て編成された歩軍の存すること

をも併せ注意して居る。

第四章「猛安謀克戸の居住地に就いて」。第一節「猛安謀克戸の居住地及び戸口」に於いては、海陵の南伐の際の徵兵に關する記事や、世宗大定五年戰亂落着後南方より放還すべき猛安謀克兵の處置に關する僕散忠義の上奏文等によつて、猛安謀克兵の本貫なるその居住地に就いて考へ、それは彼等の發祥地なる上京路はもとより、長城以北に於いては、咸平府路、東京路、河北東西路、山東東西路、大名府路を主として居たことを述べて居る。又その口數を各地方別に推定し、且つ常備軍の駐屯地と猛安謀克部の在在地とは異なることを注意して居る。第二節「猛安謀克部の冠稱」に於ては、金史、三朝北盟會編、遼東行部志のみならず、多くの地志類や遺物から、猛安謀克名を抽出し、これをその冠稱によつて各路別に列舉し、第一節に述べた事實の確證として居る。又その冠稱が、各その故郷の地名を示して居る事實から、彼等が北支那移住後も原則として、その故郷に於けると等しく、地方別・部落別の集團を成して居たことを推定して居る。第三節「居住地と冠稱との關係」は、猛安部の冠稱が、猛安戸の

故地と離るべからざる關係に在つたことを前提として、その各の冠稱を音の類似の上からこれをその原住地方の地名に比定し、猛安謀克部の故地を決定せんと企てたものである。第四節は第四章の約言である。

以上略述せるところによつて明らかなる如く、各論に於ける著者の研究は、從來の諸研究を集大成すると共に、一層これを詳細にし、更に一步を進めんとしたものである。殊に先覺の研究が、三百戸より成る自治的行政組織たる謀克部と、百人より成る軍事組織としての謀克制との關係に於いて、後者が前者を母體として居たことは認めるが、これが如何なる構成の下に結合されて居たかの疑問に就いては、何人も能くその解答を提示し得なかつた難問題であつたのである。然るにこゝに著者が敢然立つてこれに一試案を示されたことは實に學界の快事である。難解なる金史の兵志や食貨志の記事を巧に利用した上に、家族共同體たる民族學的な觀念を導入して、猛安謀克戸の農作法を考察し、信州更科村若宮の五人組組織よりの類推によつて、その徴兵法を推定し、自治的行政組織と軍事組織との關係を有機的に見んとしたことは、最も注目すべきであ

る。然しこの説も未だ推定の域を脱しないから、他に異説の出づべき餘地のあるは固よりであるが、著者の考説自身の中に在つても、尙解決さるべき問題の存するのが感ぜられる。大家族共同耕作の説に於いて「每四五十戸結爲保、聚農作時、令相助濟」とされて居る（結爲保聚。農作時令相助濟。と讀むべきである）が、これは單なる句讀點の誤記であるにしても、大家族（六戸）徴兵（二員）法の説に於いては、その唯一の史料なる金史兵志の「所簽軍、有父兄俱亡（己の誤）充甲軍、子弟又爲阿里喜、恐其家更無丁男云々」の記事に於いて、父兄が俱に甲軍に充てられ、子弟が阿里喜となつて居るとすれば、この家族から徴集されて居る兵士は少くとも三人以上と見なければならぬのに、著者は何故か、これを「一家族の内、家長たる父又は兄は甲軍として出で、自餘の丁男の中、子弟の一名は阿里喜となるといふ規定が存してゐた」と解釋して、強いて戸三百對兵百の比數に調和させて居る。又金史に單一戸の財産私有制を想はせる史料（例へば突合速傳）があり、當時の史料が悉く單一戸を單位として記載して居る事實にも、何等かの意義を認むべきであるのに、斯

る反對史料に論及して居ない點も甚だ物足りない感がある。これ等は著者としても再考察を要する點ではなからうか。

又從來女眞史の專攻者の間に於いて屢企てられ乍らその煩雜なるがために放棄されて居た猛安謀克名の蒐

バグダツト旅信

宮崎 市定

九月七日イスタンブルに着き此處が大へん氣に入りましたので十日程滞在し海峽を越えて、小亞細亞に渡りアンゴラに一日、古城の外に別に見る可きものなく、汽車の都合でカイゼリーといふ小都市に一日滞在しました。北京などよりもつと埃っぽい汚い町でした、それから汽車にゆられること一晝夜、シリアアレツボ着、此の地方第一の大都會で古い城郭が残つてゐたり博物館があつたりして割合に面白く四日間を過しました。旅行に出る時はイラクに入る考は毛頭なかつたのですが、砂漠に誘惑されて土耳其のバグダツト鐵道に乗り、イラク國境迄來、自動車にのりかへてモスルに到着しましたこの汽車は何か平緩線といつたやうな感じのする田舎鐵道で一週に二回しか動きません。時間表はあれどもなきが如く、まるで一晝夜荒漠たる平野を走りつゞけて人も荷物も埃まみれになつて、チゲリス河畔モスルについた時はホツとしました翌日早速對岸のニネブを訪ひましたが、土山があるばかりで何もなく失望しました。町の北方にアラビア時代の門や城壁が残つてゐるものゝ方がすつと興味を惹きました。町の中を歩いてゐる中、二丈程の高きの斷崖あり、ベルンヤ陶器の破片を澤山含んでゐるのを發見し表面採集——名バタヤを行ひ大ぶん集めました。勿論、形のまとまつたものなどなく、美

集、その冠稱と先住地名との比定（多少の疑問はあるも）等は、今後一層深めらるべき女眞史の研究に多大の便宜を與へるものとして學界は擧つて著者に感謝すべき點であらう。尙卷末に索引を附せられたことは大いに著者の勞を多とすべきである。（小川裕人）

術的の價値は零ですが、同じ青綠釉のものばかり隨分古い時代のものから現代のまで連續して見られる様ですから、製陶業の發達を見るにはよい材料になるかと思ひます。併し何分重いのので捨てゝ了はうかと思ふこと屢々あり、果して持つて歸れるかどうか疑問です。（中略）自動車に飛びのつてバグダツトに向ひました。所がこの自動車。貨物自動車に腰掛をうちつけたもので、動搖すること一方ならず、前進するよりは上下に動く方が多いと云ふ代物です。アラビヤ人と一しよに牛馬同様にすみこまれ身動きもならず、夜の十一時に着くといふ話したつたのが翌日の晝頃になり、結局一晝夜、漕刑囚の苦役を嘗めました。全身に打撲傷が數ヶ所出來たやうでした。（中略）バグダツトはアツバス朝のものが澤山に残つてもゐると思ひきや、市街の外郭も分らぬといふ狀態でそれも來て見て分りましたが、凡てが軟い粘土を軟く焼いた煉瓦を材料にしてゐるので一度瓦解すれば一朝に泥土に歸するといふ狀態で都市の膨張も早い代りに没落も徹底的なのでせう。この附近みな石を用ひぬ泥だけの建築にて、ペビロンにしても大したものなく、寫眞で見てどんなに綺麗かと思ふものゝ實物を見ると粘土細工なものには全く失望してしまふ。この土地アラビヤ人の尤も人氣悪い所にバタヤもうつかり出來す何の收穫もありません。バストラへ行くには日數もかかり、明唐宋の銅錢が落ちてゐるさうにもないので之はやめました。明朝當地發又一晝夜砂漠の旅をつゞけてダマスクスに入ります（十月十六日 羽田教授宛）